

新年を迎え、一言ご挨拶を申し上げます。

昨年のお挨拶文を書いている時には思いもよりませんでした、まさか元旦に能登地方であのような大きな地震があり、その後の集中豪雨被害も追い打ちをかけ、今もって復旧にはどのくらいの年月がかかるのかの目途すら立っていないことは残念でなりません。

今年は昭和100年ということのようです。個人的なことで甚だ恐縮ではございますが、昭和32年生まれの私も今年68歳になり、昨年末に受けた2度目の手術で、大腸がさらに短くなってしまいました。人生100年時代と言われておりますが、戦後生まれでは無理だと思います。義理の母は大正15年すなわち昭和元年生まれですので100歳を迎えます。比較的サービスが行き届いているいわゆる介護サービス付き有料老人介護施設に入居しておりますが、介護スタッフの確保が大変で、高齢者にとってはようやく顔と名前を覚えた頃にはまた新人が挨拶に来るといったことを繰り返しています。

新年早々このような話を申し上げたのは、最近の増税、減税論議もさることながら、その前に「人・物・金・時間」をもう少し有効に使って欲しいと強く思っているからです。

能登地方は半島のために確かに地形的にも大変なエリアであることは理解できますが、自治体職員やボランティアに頼るのではなく、もっと国家レベルの人的支援が出来ないのでしょうか？あえて暴論を申せば、陸上自衛隊が出動をしなければならない事態は当面はありませんし、将来いつどこで使うかわからない戦車などの訓練を少し減らしてでも、もう少し復興の目途が立つまで、道路の整備や倒壊家屋の撤去などの支援に向けてもらえないのでしょうか？

もうひとつの話として、自宅で家族だけによる介護などは出来ませんので、何らかの支援サービスを受けることになります。ただ、その担い手は他業種と比較して重労働のわりには低賃金を強いられて、就業率だけでなく定着率も低いです。「介護の仕事はキツイけど給料が高いから…」と選択の余地に入るレベルの国による制度設計が出来ないのでしょうか？

念頭にこんな「責任者出て来〜い！」的な話で申し訳ございません。「口でいうのは簡単。ボランティアで自ら能登でも介護施設でも行ってから文句を…」と言われそうです。

ただ自戒の念も含めて申し上げますと、黙って税金を払い続けるだけでなく、あと20年ぐらいの寿命と考えると、やはり日本の将来をになう世代、自分の子供や孫だけではなく、スキューバダイビング部においては後輩の皆様のためにも、このような機会を与えられた立場として、まずは思っていることを伝えることで、何らかの手立てになればと思いました。

とりとめのない内容になってしまいましたが、引き続き会員皆様の声を取り入れながら、会として現役諸君を支えていきたいと考えております。

皆様のご健勝とご活躍を祈念いたしまして、年頭のご挨拶といたします。

令和七年 元旦

芝浦工業大学 体育会 スキューバダイビング部
OB会 会長 長坂 明（10期）